

弱小カード会の挑戦

(協)紫波町ポイントカード会のシステム更新から見た社会課題

おかむら ひでこ
岡村 日出子

街づくり会社 (株)よんりん舎 社員
協同組合紫波町ポイントカード会 事務局員



要 旨

1. (協)紫波町ポイントカード会は、ポイント入力機器更新の費用捻出に悩み、東北経済産業局の助成によって実現を目指すことにする。
2. 国の補助金による最新型入力機器の導入で、「高齢者と小学生の安否確認サービス」を提案したが、待っていたのは苦難の道のり。
3. 補助金申請は何とか採択され、当会は、助成要件である「高齢者見守りシステム」と「子育て支援システム」を実施すべく町内を奔走する。
4. 当会は、子供や高齢者の安全を守る事業責任を負うものの、この取り組みを評価した複数の有力店が会に加入し、将来への希望も生まれる。
5. 苦し紛れの無謀な挑戦であったが、今回のような取り組みが契機で、子供を守り育てる環境や高齢者に関心を持つ環境が出来れば素晴らしいと痛感し、自らも、社会的責任を負うべき組織であると気付かされる。

1 | はじめに

地方の町の弱小な一経済団体が、厳しい環境の中、存亡をかけた取り組みに挑戦した結果、新たな地平を拓くことになった経緯と、そこから得た学びについて述べさせていただきます。

団体の名は、(協)紫波町ポイントカード会といい、私は、長く紫波町商工会の職員を務め、退職後、街づくり会社株式会社よんりん舎で働くことになり、そこでカード会の事務局業務を担ってきたために、町内の経済団体の歴史を知る立場にありました。

今回のカード会の取り組みが、同じく苦境にある地方経済団体の活動の参考になればと、記した次第です。

2 | 紫波町の沿革

岩手県の県都盛岡市は、約400年前に南部藩主が城を築いて以来、奥羽山脈と北上山脈の間を流れる大河北上川の流域に発展してきた、文字通り政治、経済、文化等、あらゆる分野での中心です。

その盛岡市の南に隣接する紫波郡紫波町が、私たちの「ふるさと」です。かつては、盛岡に先駆けて栄えた歴史を持つ地域ですが、昭和30年に1町8ヵ村が合併して出来た、3万余の人口と広大な面積を擁し、盛岡市のベッドタウン機能と農産物の実り豊かな田園を併せ持つのどかな町です。

この地は、古来より「しわ」と呼ばれた地域であるために、「志和」、「志波」、「斯波」等の字が当てられてきましたが、500年の昔、時の為政者が北上川の川面が紫色に光り輝くのを見て「今日よりは 紫波と名付けん この川の石に打つ波 紫に似て」と詠んだという故事から、優雅な郡名、町名となったものです。

3 | 紫波町の商業環境の激変

紫波町誕生当時は、町内の中小零細店も、繁栄の時代を謳歌出来たといえますが、時とともに、モータリゼーションの波が押し寄せ、同時に、大型店

やチェーン店の進出が相次ぎ、次第に苦境に追い込まれるようになりました。

もちろん、これは全国共通の流れですが、こうした中、将来を危惧した小売業の有志が、地元資本による大型ショッピングセンター（ナックス）を開業したのは特筆すべき勇断であり、同時に苦難への挑戦でもあったと思いますが、創立以来、町内の中小零細店と連携を保ち、共存共栄を目指すポリシーで頑張っております。

立地環境に恵まれていると判断された紫波町は、進出企業にとっても魅力的で、平成10年代になって、紫波町における大型店の進出が全面解禁され、当時、小売業の売り場面積に占める大型店の割合が東北一というデータが示されるほど、地元零細店のシェアは低下する一方となりました。

かつては、色々な団体が、地元イベント会場での有名歌手による歌謡ショーを企画し、そのショーへの招待を目玉にした大売出しが開催され、有力店の売上が急増し、会場が満員になりました。しかし、次第に独自開催が無理となり、盛岡市などの会場で開催される歌謡ショーへの招待がやっと、という状況に様変わりしております。

一方、広大な田園地帯の特性を生かした、10ヵ所にもなろうかという産直施設が、農家自身の手によって町内各地に作られ、運営されておりますが、県内他地区の追隨を許さないほどの充実ぶりです。

4 | 町内商工業者によるカード会の活動

こうした環境の中、町や商工会の指導のもと、商店会、専門店会、サービス店会等の組織がそれぞれの立場で努力を重ねてきましたが、時代の流れには抗し難く、今は、中心地区を含めた1、2の商店会と全町的なポイントサービスを提供する組織である当会のみが、頑張っており活動を継続しております。

紫波町ポイントカード会は、昭和47年、それまで各地区にあったサービス店会やスタンプ団体が



統合されて発足した任意団体組織「紫波町ダイヤスタンプ会」が前身で、売上に応じてお客様に差し上げるシールを台帳に貼り付けていただき、それが貯まれば商品等に交換をする全国共通のスタイルの販促サービスでした。しかしそれが、零細企業が選択出来、足並みが揃う唯一のサービス方式であったことも事実です。

5 | 印字式ポイントカードの採用

カード会が発足して20年以上が経過した平成10年、時代の変化に合わせ、全国の大型店等の導入時期には遅れたものの、専用の機器によって、売上金額に応じたポイント数を印字するカード方式に切り替えるとともに、組織を協同組合と法人化し、名称を現在の「紫波町ポイントカード会」と改めました。

ポイントカード会がサービスするポイントは、シール方式の時代から「平太くん」の愛称で呼ばれておりました。紫波町は、捕り物小説で有名な「銭形平次」の作者である野村胡堂（名誉町民）の生まれ故郷で、町民は自らの町を「銭形平次の里」と呼ぶほどに胡堂を誇りに思っております。そこでポイント会は、平次の子供として、「平太くん」と名付けたマスコットキャラクターを作り上げ、「平太くん」を会のシンボルマークとしてきました。

「平太くんポイント」の名は定着し、組織の体制は強化されましたが、システム維持のために、加盟店の負担も増えることとなりました。

高額で重量感のあるポイント入力機器を用いてのお客様サービスは、カードに慣れ親しんできたお客様にはおおむね好評で、しばらくは安定的な会運営を続けることが出来ました。

しかし、さらに20年近い時が経過し、使い慣れ親しんだポイント印字入力機器も、耐用年数の限界が迫りつつありました。故障の頻度が高まり、近い将来、機器を一新する必要性が生じていることは理解していても、果たして、今や旧式と言われるようになった高額な印字式の入力機器を採用し続けるべ



きか、新式で、さらに高額な I C カード方式に切り替えるべきか、悩みが尽きることはありませんでした。

6 | 電子式ポイントカード採用への模索

そう悩まざるを得ないほど、時代の推移は激しく、印字式の入力機器は最早時代遅れであると見せ付けられていると思えるほどに、大型店やチェーン店のほとんどは、驚くほど多機能な、電子式の「非接触 I C カード」を採用する時代へと様変わりしておりました。

一方、全国のポイントサービスに取り組んでいる団体、とりわけ弱小組織では、先進的な I C カード方式を導入出来ないでいるところが大部分であるというのが実情かと思われます。

しかし、仮に私どもポイントカード会が、I C カードの採用を目指すにしても、当会の財務内容からいって、当初の導入費用を賄うためには、会員に多額の負担を強いる他はありません。まさに組織存亡の危機が迫っておりました。

7 | 地域振興助成制度の情報

平成 26 年も押し詰まった 12 月だったと思います。こうした悩みの渦中にある紫波町ポイントカード会に、ピッタリの支援制度があるということに、ネット検索をしながら気付きました。もしやこれは、当会の危機を救う朗報ではないのかと興奮し、すぐ会の幹部役員にその内容を知らせました。

東北経済産業局の補助金制度のメニューの中に、「地域商業自立促進補助金」というものがあり、地域の中で一定の社会的役割を果たしている団体が、地域社会が求める事業活動に取り組めば、団体の望む事業に必要な費用の 2 / 3 を助成するというものです。



非接触 I C カード方式の
ポイントカードシステム

すぐに、信頼できる専門業者に連絡を取り、最新情報に明るい役員を中心に、連日、必死になってにわか勉強に取り組んだ結果、当会に当てはまる地域社会が求める事業のテーマは、助成制度のメニューの一つである「少子・高齢化対応事業」ではないかという結論に至りました。

その内容は、もし、紫波町ポイントカード会が、印字式ポイント入力方式から、最先端のタブレット型端末機を利用した非接触 I C カードシステムへの切り替えを試みる場合、その遠隔情報の伝達機能という特性と能力を活用し、高齢者の安全確認という高齢者対応事業と町内の小学生の安否確認が出来る子育て支援サービスに取り組むことが、助成の条件に合致するのではないかというものでした。

これには、カード機器会社の担当者のみならず、紫波町役場商工観光課や紫波町商工会の担当部署の方々が親身になって相談に乗り、助言してくれました。本当に感謝に堪えないことです。

8 | 助成認可への挑戦

その結果、悩みに悩んだ末ではありますが、紫波町の零細企業の砦であるポイントサービスのシステムを堅持出来、紫波町の小学生やお年寄りの安全を確認するシステムによる社会貢献が出来るなら、会を挙げて挑戦しようという思いが、役員、事務局員に満ち満ち、申請を決議しました。しかし、助成制度への挑戦は想像以上の苦難に満ちておりました。

実際の東北経済産業局への助成申請の取り組みは、当初、平成27年2月の採択を目標に始めましたが、申請内容の不十分さによってあえなく却下されました。しかし、めげずに、平成27年5月採択を目指して再度の申請を試みました。

当会の必死さが通じたのか、各方面か



らのアドバイスと当局の指導によって、前回より説得力のある内容になったとは思いましたが、どうにか、少子・高齢化対応事業による「地域商業自立促進補助金」の申請を採択していただくことが出来ました。後は、認可の条件を満たした内容でスタート出来るまで頑張るのみでした。

しかし、実際の苦労はこれからだったのです。申請し採択された事業を実行するためには、関係する多くの組織とその構成員の理解と協力を得なければなりません。正しいことをするのだから、みな無条件で受け入れてくれるだろうと思う考え自体が甘かったのでしょう。

まず、問題なく実施できるのは機器類の購入ですが、申請どおりの事業を実施する費用は、総額で2,400万円、ポイントカード会の当面の負担額は800万円に、そして補助金の額は1,600万円と算出されました。

こうした経費を算出するために、設置するタブレット型高機能端末機のセット（端末機＋印字プリンター＋無線受送信装置）等の数をきっちりと把握し、見通しを立てなければなりません。

例えば、①組合員店舗用73台 ②打ち替え用11台（旧カードのポイント为新カードへ移行する係り用）③町役場1台（カードのポイントで納税出来るようにしているため）④町内資本の大型店（相互にポイントを利用し合う関係を構築しているため）1台 ⑤本部用1台 合計87台。それに加えて、本部に設置する中枢機能を持った機器1組。

さらに、次に述べる少子・高齢化事業の実施に必要な機器の数や経費等を積算し、総費用を割り出しましたが、今回の取り組みに必要な機器は、すべて機器本体よりも、それを機能させるために組み込むソフトが命であり高額です。

そのため、購入する機器の数が膨大となるような企業や組織の場合、1台当たりの単価は、比較的廉価となるかもしれませんが、残念ながら、当会のような規模の場合、割高感否めません。そのために必要な金額は、当会にとって想像を超えるものとなりました。

ところが問題の本質は、購入する機器よりも、それを活用する事業の環境を確保することだったのです。

9 | 高齢者対応事業への取り組み

申請テーマの一つである高齢者対応事業に関し、当会が申請した提案は、「高齢者見守りシステム（シルバーサポート事業）」への取り組みでした。

その仕組みは、タブレット型端末機とそのシステムに組み込まれた遠隔情報伝達機能によって、あらかじめ登録した利用希望の高齢者の方が、ポイントカード会の加盟店で、一定日数が経っても買い物をしない、あるいは店舗自体を訪れない場合、本部の中枢機器にアラート（警報）画面が現れるというもの。その場合、本部担当者は電話によって安否を確認することで、不測の事態にいち早く対応できるというものです。

この「見守りシステム」を機能させるためには、まず、独居高齢者に関わる活動をされている組織や関係者の方々の理解と協力を得なければなりません。当会の期待を背に、その役目を担った役員と事務局は、次々に、町の地域包括支援センター、町の社会福祉協議会、町の民生委員の集まりに出向き、説明やお願いや打合せ等の活動を開始いたしました。

紫波町には、地域包括支援センターという部署に所属する「紫波町高齢者見守りネットワーク」という仕組みと「紫波町高齢者見守り隊」という組織がすでに存在しておりました。また、社会福祉協議会も民生委員も高齢者のために頑張っておられる方々です。

真っ先に、こうした方々の理解を得たい、つながりを持ちたい、出来れば協力していただきたいと、勇んで、当会の「見守りシステム」の素晴らしさを説明に回り続けたのですが、考えの甘さに泣く他はありませんでした。

無条件で好意的な対応をしてくれる方々もありましたが、殆どは、自分たちは公的な立場なので、一事業所が行う事業に協力して、もしそのシステム利用中に何らかの不具合や問題が発生した場合、責任が問われるようでは困るということで、受け入れられないと却下され続けたのです。

かなり落ち込んだものの、なるほど、公的な立場の方々のそうした気持ちや立場も理解出来ないわけではありません。そもそも、申請以前に確認すべきことではなかったのか。でも、仮に事前折衝を試みていたら、壁の厚さの前に、申請自体を諦めていたかもしれません。

ところが、再度、意を決して町の長寿健康課の担当者にお話をした結果、

「色々な立場の問題もあるが、高齢者の安全を守りたいという趣旨については、大変ありがたく思っている」との返事をいただき、前途に光明が射す思いでした。

そのことが契機で、徐々に、関係するほとんどの方々の理解を得、民生委員の方々には、独居高齢者の方々に「高齢者見守りシステム」についてのチラシ1,600枚以上を手渡していただけるまでになりました。

紫波町の「高齢者見守りネットワーク」との良好な関係も築られました。「紫波町高齢者見守り隊」は、マンパワーで頑張っている組織であるため、ＩＣカードとタブレット端末機との間のような遠隔情報伝達機能は、自分たちも備えたい能力であるということで、関係者からの要請に応じ、当会も「紫波町のネットワーク」に参加すべく、「紫波町高齢者見守り隊活動協力書」を提出し、事業遂行中に異変があった時は、すぐ地域包括支援センターに連絡し、情報提供することを確認しました。

こうした経緯を経て実施された後には、「出来れば1週間に1回は安否確認をしていただきたい」との希望を申し出る方も現われて驚きました。それはそれで大変なことではありますが、事業推進の立場から言えば、システムの趣旨を理解していただき有難いと、感謝したい気持ちでいっぱいでした。

ただ、加入してくれた高齢者の数自体は70名程度で、まだまだ低迷しています。高齢者に限らず、このシステムを理解する町民が増えていけば、高齢者を大切に作る町としてのイメージアップに繋がっていくと期待しております。

10 | 子育て支援事業への取り組み

もう一つの申請テーマである「子育て支援事業（イエローサポート事業）」の内容は、町内にある小学校11校にボックス型の「安否確認まちかど端末」を設置し、子供が下校時に、機能が埋め込まれた「安否確認キーホルダー」をかざすと、その時刻が保護者のスマホ等にメール送信されるという、システムの持つチェック機能を利用し、子育て世代が安心して働ける環境づくりをサポートするというものです。原則、1年生全員を対象にし、2年生以上は希望者のみを対象とする方針としました。

ちなみに、現在の数字ですが、小学校１１校の全生徒数は１，７１１名、うち１年生は２６９名です。紫波町は、前述したとおり広大な面積を有しており、地域事情や通学手段の問題からか、学校の統合が進み難い事情にあり、１校あたりの生徒数は１５０名強、１年生は２４名強です。

この事業が受け入れられるためには、現場の小学校の理解が絶対条件です。町の教育委員会の理解と励ましをいただき、数度にわたって小学校の校長会や副校長会に出向いて事業の概要を説明したものの、反対意見が続出し、あたかも暗礁に乗り上げた船の如き状況となってしまいました。

当然のこととは思いますが、個人情報の管理問題、トラブル時の対応と責任の所在、PTAと軋轢が生じた場合等など、日ごろ、教育の現場で厳しい状況に立たされている学校や先生方の立場を理解しないまま、勢い込んで理解を求める、こちらの想像力のなさを痛感するばかりでした。

しかし、ここで引き下がる訳にはいきません。めげずに、校長先生方を相手に事業の趣旨を繰り返し、丁寧に説明していくにつれ、少しずつではありますが、受け入れる方向に転換していただき、ついには、大多数が受け入れを認めてくれるようになりました。

受け入れを認めた校長先生方から出た要望の一つは、出来れば、全児童を対象にして欲しいということでしたが、費用の問題もあって、2年生から6年生は希望者のみを対象とすることで理解をいただきました。

また、子供でも理解できるように説明書を作って欲しいとの要望もあり、マンガを入れた説明チラシを作成して全児童に配布していただきました。

さらに、学校に問い合わせが来ないように対応してほしいとのことで、説明会や登録時にその旨を強調し、チラシにも、「問い合わせはポイントカード



紫波町平太くんカードが より便利に、より使いやすく 生まれ変わります!

新規・切替申込イベント開催

お申込、先着 **1,000** 名に!

平太くんポイント **50** ポイントサービス!

期間中に新規もしくは切替でお申込みいただくと先着1,000名に
平太くんポイント50ポイントをプレゼント!
さらにダブルチャンスで景品当たる抽選会がご用意です。

■開催日/平成27年**12月11日(金)~18日(金)**

■開催時間/午前10時~午後4時

■場所/株式会社よんりん会(日曜商店街東北銀行紫波支店北側)
紫波町日詰字郡山駅57-3 ☎019-672-5599

会場案内



※お車で会場への際は《せせらぎ駐車場》をご利用ください。

従来の平太くんカード機能に加え
高齢者見守りネットワークサービス
小学生の通学サポート等の
新サービスが追加になります。



新カード

新サービス その1

ポイントをためてよりお得に!

1 point → 1円 としてお使いいただけます。

ポイントカード加盟店でのお買い物100円(税別)につき1ポイントが付与いたします。
たまったポイントは1ポイント/1円相当で、次回の買い物からお使いいただけます。

新サービス その2 ふたつの住みよいまちづくりサポート

(別途登録申し込みが必要になります。)



平太くんイエローサポートサービス

平太くんカードのシステムを利用し、登録者への子供の小学校からの
下校時刻をメールにてお知らせします。



高橋 大輔 提供



平太くんシルバーサポートサービス

平太くんカードのシステムを利用し、登録者(高齢者)へ
近所やネットワークを結ぶ近隣支援センターと連携して行います。



お問合せ先 協同組合紫波町ポイントカード会 ☎ **672-5599**

E-mail: point@shiwacheu-p.com

平太くんカード利用加盟店は、
こちらのQRコードからチェック!



会事務局へ」と明記しました。

好意的な学校がある一方、まだ賛同が得られない学校がある状態のまま、教育委員会の支援を受け、平成27年12月に端末機設置環境調査のために各小学校を巡回し、平成28年1月になって全小学校に端末機を設置し終わりました。そして順次、町内各地区の公民館等5ヵ所で保護者対象の説明会を開催しましたが、こうした問題は学校にお任せということか、全部でわずか10名のみの参加でした。

もちろんこの間、事業を進める上で必要な情報を広範囲に伝えるために、新聞折り込みチラシ、ステッカー、手渡しチラシ等を活用し、併せて、一般町民の理解も深まるよう頑張りました。

ただ、子供たちの関心は高く、ボックス型の端末機を設置する際も非常に興味を示したこともあって、学校側の雰囲気も和らぎました。その後、学校側と細部にわたる説明や確認を行い、平成28年の2月、子供たちの歓迎を受けながら、本格稼働に漕ぎ着けることが出来ました。この時の安堵感と脱力感は、言葉では表現することが出来ません。

こうした過程を経て、父母の関心も次第に高まり、新学期を前にした時点で129名の児童が登録してスタートしましたが、平成28年度の新学期になって312人に増え、平成29年の9月時点で463名を数えております。もちろんその過半数は1年生です。

11 | 事業実施団体の社会的責任と未来への期待

こうした取り組みは、各種メディアも関心を持ち、色々な機会を取り上げて記事にしてくれたために、会の広報活動では手の届かない町民にも情報を届けることができました。

結果として、少子・高齢化対応事業に取り組むことによって、会の未来を切り開くことが出来るほどの、高額な助成をいただくことが出来ました。

しかし、それは将来にわたって、子供やお年寄りのために、安全を守る事業を継続する責任を担ったことでもあります。それでも、ただ負担をし続けるという一面だけを見るべきではないと考えております。

紫波町には、平成元年ごろ、当時の竹下内閣が行った「ふるさと創生事業」

でいただいた1億円の基金を活用し、温泉掘削事業が行われ、温泉に縁のなかった紫波町に温泉が湧き、ラ・フランス温泉館（紫波町名産品の一つが洋ナシのラ・フランス）という保養施設が出来、連日、温泉も物販施設も多くの人で賑わっております。

ポイントカード会は、会の存続と会員増強のための努力を続けてきたものの、必ずしも、いい結果が生じて来たとは言えません。地元資本のショッピングセンターとの提携関係は例外で、産直施設や商工会の会員以外の物販施設等に会員になっても

ポイントカードで地域の見守りに貢献

カード第1号を紫波町長（左）に贈呈する加藤正規理事長（中央）と加藤孝典理事長（右）（12月10日）



新カード（右）とカードと連動させられる「お守り」（左）

（加藤孝典町ポイントカード会（加藤正規理事長）は12月11日から、国の地域商業立促進事業を活用し、新ポイントカードの発行を始めました。従来の買い物ポイント機能に加え、高齢者や子どもの見守りに役立つ機能が付与されています。町内から任意で付けられることから、安全安心な地域コミュニティづくりにつながることを期待されています。同会の加盟店は現在78店舗、ポイントカードの登録は、日経商店街にある経形平次会館内の同会事務局で行うことができます。

※紫波町の見守り、利用者が一定の期間に買い物履歴がない場合に同会事務局が安否確認をするというもの（登録料0円）。子どもの見守りは、町内各小学校に設置された専用機器に子どもたちがICチップ入りのお守りをかざすことで、保護者に下校時刻が通知されます。ICチップ入りお守りは、本年度中に町内全小・中・高1年生に配布される予定で、サービスの利用には保護者のカード登録が必要です。

岩手日報 2015年（平成27年）12月12日（土曜日）



新カードとタブレット端末、新サービスに使うお守りを贈る加藤孝典町ポイントカード会の伊藤政之副理事長（左）。右は学校に設置する端末機。

児童の下校時間通知 高齢者の安否を確認

紫波町 買い物物、見守り集約

平太くんカード 一新

紫波町ポイントカード会（加藤正規理事長）は、加盟店に買い物すればポイントがたまるとする「平太くんカード」を一新し、日頃から運用を始めた。システム更新に合わせて、小学生の通学サポートや高齢者の見守りサービスも開始。日経商店街の同会事務局（水戸1会）で18日、新聞・切符式市しきみイベントを開いている。

日経イベント初日は、約500人が参加。加盟店の提供品が当たる抽選会も開かれた。開場で、申請し、今年度中に500枚に達すれば、次のカードを発行する仕組みだが、今後は紫色のカード（内として利用）と、5年ぶれたまると年間の買い物履歴を発行する。1日現在の加盟店は78店、カードを一新するのは約10年ぶり。国の地域商業立促進事業補助金を活用した、旧カードの廃棄券（500円）は今後も有効になる。

ユニークなのは新サービスの「イニエローサポート」。登録した小・中学生が下校時、専用の「お守り」を学校に設置された専用機にかざすと、通学時刻を保護者にメールで知らせる。システム利用で

岩手県紙ともいえる岩手日報の紹介記事

登録が順近日数1、2、3週間から1ヶ月、金額は加盟店で買い物をした分、ポイントカードの残高は順次増える。事業の趣は関係機関と連携して対応する。

加藤理事長は「ポイントカードだけでなく、社会福祉や市民のためにもサービスを提供したい」と強い意欲を示す。イベントは午前10時から午後4時、問い合わせは同ポイントカード会（019-629-5599）へ。

らうのは、かなり困難な状況でありました。

しかし、少子・高齢化事業に挑戦したポイントカード会の姿勢を評価したラ・フランス温泉館では、限定的ではありますが、物販部門でのポイントカード会への参加を決めてくれました。

また、紫波町は、地元の農産物を活かす事業に取り組むため、ワイン造りを始め、いまや「自園自醸ワイン」として広く名を馳せております。その工場と売店は、ある産直エリアの中にある関係で、商工会繋がりポイントカード会に関わる決断が出来にくかったようですが、温泉館と同様に加盟を決断してくれました。

こうした動きはまだ続く兆しがあり、会全体の業績をかなり向上させるほどの好影響を与えてくれると期待しております。

さらに有難いことに、地元にある四つの金融機関の間にも、頑張っているポイントカード会を助けたいとの空気が広まり、快く融資に応じてくれた上に、活動費の助成までして頂き、本当に感謝以外ありません。

今回の高齢者対応事業にしても、子育て支援事業にしても、スタートした時点では、ポイントカード会が期待したレベルからみれば、まだまだ、満足できる数字とは言い難いかもかもしれません。しかし、社会が求める方向に合致した取り組みであることは間違いないと確信しております。

その証拠に、町内小学1年生の全員参加や過半数の小学生の参加も夢ではないと思えるほど、受け入れ家庭は増え続けているし、見守ってほしいと希望する独居老人の数も増えるきざしが出始めております。

12 | 終わりに

今回のポイントカード会の取り組みは、まぎれもなく、自らの存続のための苦し紛れの取り組みでした。しかし、取り組みの過程において、私たちの社会に必要と思われる色々な仕組みが、様々な要因によって実施困難な状況に陥ったり、問題自体に気付く機会を見逃したりしていると痛感させられました。

本来、ポイントカード会とは無縁と考えていた社会的な事業に関わることによって、何と多くのことを学ぶことが出来たでしょうか。

近い将来、こうした事業が契機となって、たとえば、紫波町全体に、子供を守り育てる環境や高齢者に関心を持つ環境が築かれ、そうしたシステムの理解者や支援者、あるいは担い手が増えるようなことになれば、町民にとって、こんな素晴らしいことはないだろうと思います。

いや、むしろこれこそが、弱小企業の集まりとはいえ、本来、地域の経済団体が、利益を追求する活動と同時に、それぞれの特性を活かして、担わなければならないテーマや役割の一つであると痛感した次第です。